

心の中にある昔話像

——心の方向性——

千 野 美 和 子

The Fairy Tales' Image in the Mind—The Direction of its Change

SENNO Miwako

1. はじめに

「白雪姫」「赤ずきん」「ヘンゼルとグレーテル」これら3つの昔話は、ドイツ地方で語られた昔話であり、それらはグリム兄弟によって収集され、日本にも伝わり広まった。ここで述べるのは現代の日本の聞き手（あるいは読み手）の心の中にある昔話についてである。それらはドイツ地方で語られていたそのままの昔話ではなく、現代の日本人という聞き手に規定されて生じた昔話である。

昔話は人の心の中に存在することによってその人の心の反映を受け、元の昔話とは異なるものとなる。その異なり方は様々であるがその中で個人を越えた共通した異なり方が存在する。つまり心の中に入った昔話はある一定の方向性を持って変容すると思われるのである。それは、昔話のもつ方向性でもあり心自体の方向性でもあると思われる。その方向性についてここで考えてみたいと思う。それは、Lüthi, M. (1968) が昔話の機能として、『人を安心させるような確実さ』と述べたものでもあると思われる。

2. 心の方向性

心の中の昔話は快い部分は強められ恐ろしい部分は弱められていくという一つの方向性について具体的に調査の結果をあげて考えてみたい。ここにあげるのは以前筆者が調査した結果である¹⁾。前述の3つの昔話がどのように知られているか、どこが印象に残ったかについて調べてみた。話を展開に従って7つの場面に分けてそれぞれ記憶点、感動点としてあげた。結果は男女年齢別に集計されたが、ここでは全体としてまとめて考えたいと思う。

記憶、感動点について考える場合4つに分類することが可能である。a. 記憶、感動点とも高い場合。よく知られていて印象度も強いという場合である。数値の大きい順に並べると記憶点、感動点とも上位にくるもの。b. 記憶点は高いが感動点がそれほど高くない場合。よく知られてはいるが印象はそれほど強くないという場合である。順位でいうと記憶点は上位にあるが感動点は上位にないもの。c. 記憶点は低いがその割には感動点が低くない場合。あまり知られていないが印象は比較的強いもの、もし知られていれば感動点をもっと高くなるであろうと予想されるもの。感動点÷記憶点の数値を並べた順位が感動点の順位より上位にくるもの。d. 記憶点感動点とも低

いもの。あまり知られてもいないし印象も薄い。先のa.～c.にあてはまらぬものである。

以上のような点から3つの話をそれぞれ7つの場面に分けて考えてみよう。

《白雪姫》

- A. 始まり
- B. 魔法の鏡を見て妃が姫の美しさに嫉妬する
- C. 妃は狩人に命じて姫を殺そうとするが狩人は姫を逃がす
- D. 小人に助けられ生活する
- E. りんごを食べて倒れる
- F. 王子に助けられる
- G. 妃は罰を受ける

A～Gの場面を感動点，記憶点，感動点÷記憶点，それぞれの数値を大きい順に並べてみると以下ようになる。

感動点 D>F>E>B>C>G>A

記憶点 E>F>D>B>C>A>G

感動点／記憶点 D>F>E, G>B>C>A

a.にあたるのがDF, b.にあたるのがE, c.にあたるのがG, dにあたるのが残りのABCと考えられる。

《赤ずきん》

- A. 始まり
- B. 途中狼に出会う
- C. 花を摘む
- D. おばあさんが狼に食べられる
- E. おばあさんに化けた狼と赤ずきんが出会う
- F. 赤ずきんが食べられる
- G. 狩人に助けられる

同様に，

感動点 G>E>F>C>D>A>B

記憶点 A>F>G>E>D>C>B

感動点／記憶点 G>E>C>F>D>A>B

a.にあたるのがCE, b.にあたるのがAF, c.にあたるのがC, d.にあたるのが残りのBDとなる。

《ヘンゼルとグレーテル》

- A. 親に捨てられる
- B. 小石やパンを落として帰り道を見つける
- C. おかしの家を見つけおかしの家を食べる
- D. 魔女につかまる
- E. 魔女をかまどに押し込めてやっつける
- F. 宝物を持って白鳥に乗る

G. 家に帰る

同様に、

感動点 C>E>G>B>A, D>F

記憶点 C>D>A>E>G>B>F

感動点／記憶点 C>E>G>B>F>A>D

a. にあたるのがCE, b. にあたるのがAD, c. にあたるのがFで, d. にあたるのが残りのBGである。

a. にあたるもの、つまりよく知られかつ感動点として集中するものは、「白雪姫」の《小人との生活と王子に助けられる》場面、「赤ずきん」の《化けた狼と出会い狩人に助けられる》場面、「ヘンゼルとグレーテル」の《おかしの家を見つけ魔女をやっつける》場面である。また b. にあたるもの、よく知られていながら感動点としてあまり集中しないものは、「白雪姫」の《りんごを食べて倒れる》場面、「赤ずきん」の始まりの《赤ずきんがおばあさんの家に見舞に行く》場面と《狼に食べられる》場面、「ヘンゼルとグレーテル」の《親に捨てられ魔女につかまる》場面である。c. にあたるもの、あまり知られていないが知られていたら感動点として集中する可能性のあるものは、「白雪姫」の《妃の罰》の場面、「赤ずきん」の《花を摘む》場面、「ヘンゼルとグレーテル」の《宝物を持って白鳥に乗る》場面である。

a.b.c. にあたるそれぞれの部分を話の内容からみてみた場合、a.b. にあたる部分は＜その話を展開していく上でどうしても必要欠くべからざる部分＞であり、c. の部分は＜その話の展開の上でどうしても必要な部分＞ではなく、＜なくても話が進んでいく部分＞であると思われる。《妃が罰を受ける》場面も《赤ずきんが花を摘む》場面も《ヘンゼルとグレーテルが宝物を持って白鳥に乗る》場面もその場面自体としてはかなり印象深いとその場面がなくても話は進んで行くのである。それゆえに本来一つの話の一場面としてあった部分が記憶部分においてぬけ落ちてしまうのではないだろうか。

また、a.b. はその話を展開していく上で切り離すことのできないものと思われるが、感動点として集中するしないはどこから生じているのだろうか。a.b. それぞれの内容を見ていくと、a. にあげられているのは《小人の生活》や《王子に助けられる》場面、《化けた狼と出会い狩人に助けられる》場面、《おかしの家を見つけ魔女をやっつける》場面であり、どれも＜楽しいおもしろい幸福＞といった快あるいはポジティブな感情をひきおこす部分である。それに対しb. にあげられている部分は《赤ずきんがおばあさんの家に見舞に行く》場面を除き、《りんごを食べて倒れる》《狼に食べられる》、《親に捨てられ魔女につかまる》場面であってどれも、＜こわい恐ろしいといった脅威あるいはネガティブな感情をひきおこす部分＞である。（《赤ずきんが見舞に行く》場面は＜話の展開の中で必要なしかし感情的にはニュートラルなエピソード記憶＞のように思われる。）つまり快部分が感動点として集中し脅威部分が知られていながらも感動点としてはあげられないのである。このために心の中の昔話は＜夢のある快いもの＞として印象づけられているのではないだろうか。確かに話の中には＜恐い部分＞やいわゆる＜残酷な部分＞もあり、心の中でそれらは記憶として存在してはいるが、印象あるものとしては意識されていないのである。それに反比例するかのように快部分がますます強調されるように思われる。

さて、《ヘンゼルとグレーテルがおかしの家を見つける》という場面と《魔女をやっつける》

という場面は同じく快部分でありポジティブな感情をひきおこすものでありこの二場面に感動点が集中するのであるが、年齢別にみると小学生はほぼ2点に感動点が分散するのに対し中高大生はおかしの家に多く集中するのがわかる。小学生は他の年齢に比較して、《ヘンゼルを助けるために勇気を出して魔女をやっつける》という同じ快部分ではあるが＜脅威に打ち勝つ部分＞に印象づけられ、中高大生は同じ快部分でも＜夢あこがれのシンボル＞ともいえるおかしの家に強く印象づけられているといえる。同じ快部分でも経験時期がある程度経過することによって、つまり心の中に昔話が存在することによって、快そのものがより一層強調されると思われるのである。心の中では昔話は＜夢あこがれの部分＞のみが生き生きとイメージされるのである。また、同様のことが『赤ずきん』の《化けた狼と出会う》場面と《狩人に助けられる》部分においても考えられる。小学生で《狩人に助けられる》という＜脅威を取り除くことによって得た快部分＞に感動点が集中していたのが、中、高大と減少して行き、反対に《化けた狼と会話をする》という＜滑稽と思われる場面＞に感動点が集中してくる。

三つの昔話の印象に残った部分を話の展開の中で見てみると印象の強い2つの快の部分の脅威の部分を含んで存在していることがわかる。《小人との生活》と《王子に助けられる》快の間には《りんごを食べて死ぬ》という脅威、《化けた狼との会話》と《狩人に助けられる》快の間には《狼に食べられる》脅威、《おかしの家》と《魔女をやっつける》快の間には《魔女につかまえられる》脅威がそれぞれ存在している。本来の話の中では快と脅威部分が交互に存在し互いに相手を極立たせることによって話を盛り上げ展開していくものと思われる。印象に残る快部分は脅威に挟まれることによって一層ポジティブなイメージが強まると思われる。また快い所に脅威が侵入しそれに打ち勝つことによって快を回復するとも考えられる。つまり単に＜快いだけの生活＞を描いているのではなく＜そこに侵入してきた脅威を打ち砕くことができるという可能性＞を昔話は描いているともいえるのである。この部分ゆえに、Lüthi (1968) は『人間存在の差し迫った問題に対して自分なりのやり方でひとつの答えを、心の奥深く幸福を与えるような答を提供する』と述べたのではないだろうか。それはまさに『人を安心させるような確実さ』を与える。

このように快と脅威両方とも昔話の中には存在しているのではあるが、心の中にある昔話は脅威の部分を意識していず、繰返し楽しい夢のあるものをイメージし続けるのである。

3. その奥にあるもの

＜快い夢の世界＞を描いていると思われる昔話の意識されていない、意識の背後にあるものについて考えてみたい。

「白雪姫」の《小人に助けられ生活する》場面は、最もよく知られている「白雪姫」の話の中でも、＜最もよく好かれている＞場面である。Bolte, J. & Polivka, G. の集めた類話の中の1812年10月12日 kassel 地方 Wildschen Hause の Marie からきいた「白雪姫」は次のようであった。『森のはら穴に7人の小人が住んでいる。彼らはそこに近づく少女は誰も殺す。それを王妃は知っていて、直接に殺さずにやっかいばらいができると思った。それで姫を穴まで連れて行き、穴の中に入って待っていなさいと姫に告げる。姫は穴の中で恐れずにいた。すると小人達がやってきて初め姫を殺そうとした。しかし姫があまりに美しいので彼女を生かしてやり、そのかわりに家の仕事を自分達のためにするように言った。』ここでは小人は少女を殺す恐ろしい

殺し屋として登場する。もちろん姫の美しさのために殺すことはできないのだが。

また、7人の小人のかかわりに登場するものについて類話を調べてみると、最も多いのが盗賊(1, 7, 12, 13, 14, 24人の)で、他に竜(7, 14匹の)14人の巨人、7人の金鉱山夫、3人の熊王子、3人の労働者、呪われた精霊、海の精、森の家の白髪老人、仙女、乞食女など様々の存在があげられている。それらの多くは、人と離れて孤立した場所に住む、日常の世界に住むというよりは非日常の世界に住むもの、荒々しく無気味な男性イメージ、恐いという感情をひきおこすものである。

Duff, von J. F. G. は、Winterstein, による小人との共同生活と未開民族のある風習との関わりを論じた論文を紹介している。すなわち『昔話の主人公の、ある期間孤立して生活するというモチーフは、未開民族が思春期の少女をよく孤立させるという風習(少女追放)の痕跡である。この追放の時に少女は思春期の始めに父の家の外にある建物の中に一人で、又は別の同様な少女と一諸に閉じ込められる。この風習の意味は少女を他の人から孤立させることである。ある時が経過し、少女が様々の習慣に従った時彼女は将来の夫と一諸にさせられる、そしてその種族の女性のもとで一人前の女性として生活する。そんな風に、白雪姫は人と離れて暮す、未来の夫が現われるまで。追放中の少女は怪物、先祖の霊又は父がわりのものによって支配されると仮定される。その証拠とされるのが月経の出血である。たぶんこの祖先の霊の役割が小人に与えられたのだろう。』という。また、王妃に殺すように命じられた狩人が、森の中で白雪姫を逃がしてやるモチーフについても Winterstein は以下のように語る。『多くの種族で、思春期の少女は村の外、荒野のような所で、年とった男又は父親役の祭司に多く指でしばしば石刀又は似たような道具で処女をけがされる。』それについて Duff は『昔話の願望充足的傾向は処女を奪おうとする危険な男を親切な思いやりのある男にしてしまう』と述べる。

このように現在では＜明るく楽しいイメージで色どられた昔話＞の奥に＜暗くて深いもの＞が存在する。逆にいうなら Duff の述べているように昔話の願望充足的傾向によって＜暗いもの＞が昔話によって反対の＜明るいもの＞に変えられたことに(この場合危険な男から思いやりの男にかえる)なる。それはまた Lüthi が『昔話はこの暗い心の内部におきた動きを、明るい話の筋の中の場面に純化してしまう』という所でもある。

また、本来暗い部分であったものが Lüthi のいう純化作用を受けて軽くなりつつあるもの、つまり明るさと暗さ両面を持っているものについて考えてみたい。＜明暗の奥深いイメージ＞ゆえに心の中に強く印象づけられていると思われる。「赤ずきん」の《化けた狼との会話の場面》は＜おもしろい快の部分＞として感動点が集中すると述べたが、元来＜恐ろしい場面＞でありそこに＜滑稽さ＞が加わったと思われるのである。つまり読む者はそこからこわさとおもしろさを感じず。何も知らない赤ずきんが素朴に自分の疑問をおばあさんの狼に投げかける。『かわいい』赤ずきんがいつ狼に食べられるのかと思うと『ハラハラしてこわかった』のであり『スリルのある』場面である。それに対して狼は『四苦八苦して』『ごまかし』たり『言い訳』したりする²⁾。そこにはユーモラスなおもしろさを感じる。これは暗いものがその奥に潜むものを解き放し軽くされ、まさに明るさに覆われようとする過程を表わしている。また、年齢の増加とともにここにより多く感動点が集中することから心の中においてもその純化作用が生じていることが考えられよう。

以上のように、《小人との生活》、《狼との会話》について、＜暗い恐ろしい部分＞が＜明るい快い部分＞に移行する点について考えてきたが、次にそのように移行しえず欠落してしまう部分について考えてみよう。

「白雪姫」の最後で《王妃は罰として焼けたくつをはいて死ぬまで踊り続ける》。この部分は記憶に比して印象度の高い部分であるがあまり知られていないことがわかる。前述の調査で347名中15名（4%）がこの部分を記憶点として記述しているのだが意外にも原話通りのものは1例しかない。もちろん《王妃が罰として死ぬ》という結末がほとんどであるがその死に方は様々であり、『白雪姫が生きているのを知りビックリして』『谷から落ちて』あるいは『狩人、小人に殺されて』『鏡の破片がつきささり』死ぬ。『一番醜い姿になってしまう』『醜いカエルになってしまう』また、『悪い女王を追い出して幸福に暮す』という「ヘンゼルとグレーテル」の結末のごときものもある。しかし1例のみ『舞踏会の時白雪姫が妃をかばってくれたので妃の気持ちが変わった』という和解らしきものもある。この中で感動点としてあげられているのは2例『やつつけられる所』『鏡の破片がつきささって死ぬ所』である。

日本で活字になっている「白雪姫」を幾つか調べてみると33例⁹⁾中17例は何らかの王妃についての結末があり、うち原話通りは5例で、《白雪姫が生きているのを知りショックのあまり死ぬ》というのが5例、《頭を打って死ぬ》4例、他に、《谷に落ちて、鏡が割れて死ぬ》、《醜い顔になる》など調査したものと同じ内容がある。残り16例は《白雪姫は幸福に暮しました》で終わり王妃のことは触れられていない。

Bolte & Polivka の類話から、「白雪姫」としてあげられている類話⁴⁾の中で、最も多く含まれている部分は＜王子が生き返らせる部分＞(44/48)＜小人に助けられる部分＞(42/48) ついで＜王妃が姫を殺そうとする部分＞(37/48)で、最も含まれていないのは＜王妃の罰の部分＞(13/48)で、妃の罰を含むものより、その部分が欠けている類話の方が多いことがわかる。罰の内容は示されていないが、《王妃は自殺する》(フランス)《王妃は許される》(白ロシア)というのがある。

このように「白雪姫」の罰の部分の欠けているものがかなりあり、「白雪姫」の話がその部分なしでも存在することが可能であることがわかる。また、原話の《焼けたくつをはいて死ぬまで踊る》という罰は他の昔話や伝説にも現われており、1つのモチーフとして「白雪姫」の内容から独立して存在しうることを示している。罰自体も様々であり他の罰を示すモチーフに変えられることがわかる。さて、この罰のモチーフはいわゆる＜残酷だ＞とされており、確かに強烈に心に印象づける脅威部分と思われる。この暗い部分が明るくなること（例えば前述のように妃が改心する）は心の方向性としてかなり不自然でありまたかなりのエネルギーが必要であると思われる。また残酷度の強いものを弱いものに変える（外からの罰というより内側の理由、例えば《姫を見てショックで心臓が止まって妃は死ぬ》）のはより自然な方向性であるが、残酷性が減った分だけ印象も弱まり最後には消えてしまうのではないと思われる。つまり暗いものを明るくする昔話の純化作用として、この部分は意識の外に消えてしまうのが自然であると思われるのである。確かに、Bettelheim, B. は妃が死ぬということで内外の災いの元を排除しなければいけない、とその必要性を述べ、実際類話の中で《結婚後もさらに妃が姫を迫害する》話がある。しかし、ことさらに意識の上にあげて妃の罰について語る必要はなく、無意識裡に妃を罰していると

思われる。なぜならば心の中の昔話は白雪姫の幸福に満ちあふれており、妃のことなど気にも止めていないのだから。

4. 小人、そして小人と生活すること

最も感動点として集中する快の部分、「白雪姫」の《小人と生活する》場面を通して、昔話の持つ夢、あこがれについて考えてみよう。

小人について、Bettelheim は以下のように述べる。『小形化された男性である小人は1つ1つの昔話によって表わす意味が違う。「白雪姫」に出てくるのは人を助けてくれる小人達である。小人の生活の本質は＜働くこと＞であり、余暇とか遊びとかいうことは小人は知らない。成熟した人間に発達しそくなって永久にエディプス以前に留まっている存在である。また男性性器的な意味も秘めてはいるが決して性的な意味での男性ではない。小人には内的葛藤がない、きまりきった行動の繰返しに満足し、生活に変化がなくそれを望みもしない。小人は＜未成熟で個人差のまだない状態＞を表わしており、白雪姫が乗り越えて行かなければならない状態を象徴している。白雪姫の非常に重要な発達を極立たせる引きだて役にすぎない。』このように彼は小人に対してポジティブな評価はもっておらず、白雪姫に対比される添物とみなし、通俗的に作り変えられたという「白雪姫と七人の小人」の小人の強調を非難している。しかし人はなお小人に強く魅きつけられている。それはいったいどの部分に対してだろうか。

前述の調査で、最も印象深いものとして《小人との生活の部分》をあげたものは、回答者270名中101名(37%)であった。詳しくその内容をみていくと、《小人と白雪姫の生活》をあげているもの(43名で女子の方が多くあげている)と《小人そのもの》についてあげているもの(58名)に分けることができる。前者は『小人と楽しく仲よく暮らすところ』という表現が最も多く、『白雪姫と小人が遊んでいる所』という表現も見られる。また『小人が白雪姫を助ける』『七人の小人が白雪姫にやさしくしてあげたところ』と小人の白雪姫に対する愛情、やさしさをあげている。『料理や洗濯をしている所』と小人との生活の中で白雪姫がする仕事をあげている者もいる。後者では、やさしさ、かわいらしさ、親切さをあげているものが多く、他に、『小人が石を掘る』という仕事について、また協調性、ユーモラスさ、小人、あるいは小人の家の小ささについて述べているものがある。

これらのことから、小人との生活の楽しさ、おもしろさ、あるいは小人のかわいらしさ、やさしさ、親切さに魅かれているのがわかる。つまり、そこに＜現実から離れて自分にやさしくしてくれる人とともに楽しく暮したい＞という共通した願望が投影されているとみなせるかもしれない。また、小人のイメージとして、一人ぼっちの姫を助け姫に親切にし一諸に暮らす＜保護者＞としての要素と、かわいいと表現されているように、料理や洗濯など＜世話をしてあげる子供＞としての要素がみられる。

さて、この部分を感動点としてあげたものを年齢別にみると、男女差なく中学生が他の年齢よりもこの部分に感動点が集中していないことがわかる。逆にもう1つの快部分で感動点の集中する『王子に助けられる』部分に他の年齢より多く集中していることがわかる。つまり他の年齢と違って同じ＜助けてくれるもの＞でも小人より王子に魅かれているのである。これは年齢とともに、『小人との生活』部分に感動点が集中するのが減少し、反比例して『王子に助けられる』

部分が増加するであろうとする予想に反するものであった。それは、感動点は心の内面を反映し、年齢とともに、少女から女性へと成長するために必要な保護された生活から生涯の伴侶と出会い結婚するという最終目的へと移行すると考えたからであった。この考えからいうなら、中学生で一旦目的に到達してしまい再び小人との生活にもどることになる。しかしこれは心の内面そのものを反映するというより心がこれから目差すものを反映していると考えた方がよかったのかもしれない。中学生は＜安楽な保護された状態＞から＜未知の世界＞へとはばたこうとするまさにその状態にあるのだろう。また、小人との生活は中学生にとって保護されたものというより＜困るもの＞、＜成長を阻むもの＞としてネガティブなものとして取られるのかもしれない。そして性的な意味での異性へと向う時期である。

小学生はともかく高大生が小人との生活に魅かれるものは何だろうか。『変化するという ことは、それまで享受していた何かをあきらめねばならないことを意味する。危険を冒してこういう変身をする人を渉る人間は決して愛と結婚という幸福を味わえない』と Bettelheim が述べるように、彼らは変化するのを避けて安楽な生活に逃げているのだろうか。それは単なる退行にすぎないのだろうか。彼らの求めているものは何だろうか。ここで小人との生活の意味について考えてみたい。Winterstein によると未開民族の少女追放の期間に少女は女性訓練に属する仕事を学ぶという。また『試練と問題解決の時にあたっているのは、白雪姫が小人と過ごした年月でこの期間に、白雪姫は成長する。小人に導かれて、世の中のいろいろな問題に一人で立ちむかえない女の子から、よく働きそれを喜びとすることを学んだ女性へと成長する。』と Bettelheim が述べるように、この時期に一人の女性として必要な様々の仕事を学び、それを成し遂げるようになるのである。それは小人のために料理をすることであり、家をきちんと整頓することである。彼らはこの生活を『楽しい、愉快的、』と称し、『遊ぶ』とも言う。しかしそこで意味しようとするのは、『楽しく愉快に遊ぶ』という文字通りの意味ではなく、この場で自らの存在が許され安心して自分のしようとする課題をすることができ、そういう体験ができるという点でこのことが使われていると思われるのである。その体験をしようとする場としての意味があるからこそ年齢によらずその場を求めたいと願うのではないだろうか。では、その場にいる小人とは何を意味するのだろうか。王子のようにそれは性的結合のための男性を意味しない。『かわいい』と表現されるように世話をしたくなる子供でもあり、途方に暮れた白雪姫を助けてくれる保護者でもあり、白雪姫とともに妃に対抗する兄弟又は仲間でもある。白雪姫が＜小さい何もできぬ女の子＞から＜仕事のできる女性＞へと成長するのに応じて小人はやさしい保護者からかわいい子供へと自在に変化することも可能である。だから小人の『かわいらしさ』の強調は白雪姫としての成長をより強めていることになる。Bettelheim が親もいず結婚もせず小供もない内的葛藤のない成長の止まった人間だと述べたが、そうではなく内的葛藤をする必要のない＜成長を超えたところにある存在＞、子供でもあり親でもある、＜すべての時を含んだ存在＞として白雪姫の前に存在している、そして白雪姫の成長を助けるというより＜見守り付添う者＞としての役目を果していると思われる。また、小人は人物そのものを現わしているのではなく、＜それとともにあることによって成長が育くまれるもの＞、＜安らぎそのもの＞を象徴しているともいえる。また、『昔話はわれわれに次のことを保証しようとしているかのように思われる。……おまえは自分が深い意味のある関係の中に立っていることを確信してよろしい』と Lüthi が語るころのものを象徴

していると思われるのである。だからこその小人とともにいたいと願う。その心が強くあり広くゆき渡っているからこそ、『時々小人の所へ遊びに来る』『小人も一諸に城に行く』話をもついわゆる再話が生まれるのである。是非はともかくこれは再話者個人の頭の中で考えたことではなく再話者が心の中の1つの願いを感じ取り、形としたものである。

5. もう一つの心の方向性

『昔話は内的平安の中から育ってくるものである』と Lüthi が述べるように平安から育った昔話は、平安を人の心に与える。人々はそこに望みの叶う可能性を信じる。それゆえに昔話は＜夢のある＞とされる。ここで＜夢のある＞というもののひとつの側面が生じる。現実にはありえない、くだらない、あるいは子供だましだという意見が生じる。彼らにとって昔話は安らぎを与えるものではなく、＜ばかばかしい非合理的な役にたたないもの＞でしかない。この昔話の＜夢のある＞という両面をポジとネガに考えるなら前述の調査で最もネガと映るのは、中学生、特に男子であった。この3つの昔話は女性の主人公ゆえに男子にとって関与度が低いのは当然であるが、先にみたようにこの年齢は安定した場から飛び立とうと目差す時期であり、安らぎを与える昔話が否定的なものにみえるのは無理のないことである。調査でみられる中学生の昔話に対するネガ的見方は、まず記入しないことに表われている。すなわち、「回答なし」が他の年齢より多く、また回答された中でも記憶、感動点の数値が低く出ることが多い。他の年齢よりこの昔話を知らないといえるかもしれないが、それよりも、記入用紙を前にしこれらの昔話を思い浮かべて書く気がしないというのが本当の所ではないだろうか。彼らにとってこれらの昔話は心の底に眠ってはいても、ポジティブな感情をひきおこさない、あるいはネガも含めて心を動かす情動そのものを生み出さないものなのかもしれない。感情に色どられない単なる記憶の痕跡にすぎないのかもしれない。

あるものは書かないということで自らの気持ちを表現したが、あるものは書くということで自らの気持ちを表現している。ここに示すのは彼らの書いた昔話の実例の一部である。

中学生男子A.の書いた「赤ずきん」

『狼が猟師に鉄砲で打たれて赤ずきんちゃんとおばあさんと猟師が狼を食べて下痢をして死んで幽霊になった後に狼が下痢から狼に変わって赤ずきんちゃんとおばあさんと猟師を幽霊になって追いかけて行き、結局赤ずきんちゃんとおばあさんと猟師を狼が食べてしまった話』

ここでは、狼を食べてしまう3人と幽霊になってまで3人を食べようとする食い意地のすごさに圧倒される。ここでは食べるものと食べられるものの逆転がおこる。

同じくB.の書いた「赤ずきん」

『赤ずきんとおばあさんが狼に食われて猟師もついでに食われて世界中の生物をも食われて狼以外の生物は1つもなくなった。狼の身長はおよそ1000万km、体重5079tにもなり地球は大爆発し狼もふっとんだ話』

この狼の食いつぶりはみごと。なんでもかんでもパクパク食べてしまう。しかしあんまりのみこみすぎて狼の重さに耐えきれず爆発するという。また、B.はこの話の中で『猟師が食われる所が好き』という。強い正義の味方が負けることの滑稽さか、めでたしで終わらせたくないのか、ともかくそうすることによって話は先へと進んで行く。

同じくC.の書いた「赤ずきん」と「白雪姫」である。

『昔々、赤ずきんちゃんという女の子がいました。病気のおばあさんの所へ御見舞に行く所を狼に見られて（狼は）おばあさんを物置に隠してベッドの中に隠れました。そして狩人とたまたま交和条約を結んでいたため仲よく赤ずきんちゃんを食べました。』

『まま母との策略で白雪姫は小人達と接触してこき使いました。そして小人達をたくさんこき使い無茶苦茶したあと隣の国の王子とも接触したために死ぬ真似をして接触してこき使ってその国を占領してまま母と仲よく暮しました。』

C.の話では両方とも敵対者が逆に仲よくなる。そして良い者の狩人と白雪姫が実は悪物だったという逆転がある。

同じくB.の書いた「白雪姫」

『白い雪の日に生まれた姫の話もたてまえ。本音は、色が白いのはいいのだが雪のように冷たく100℃の湯も一瞬にして氷になってしまうから姫を北極海に捨てるようになったが小人によって助けられた話』

姫は雪のように白く美しいためでなく雪のように冷たいために捨てられてしまう。

同じくD.の書いた「ヘンゼルとグレーテル」と「赤ずきん」

『ある所におじいさんのヘンゼルとおばあさんのグレーテルがいました。おじいさんのヘンゼルは山へ柴刈におばあさんのグレーテルは川へ洗濯に行きました。洗濯している時川から大きな桃が流れ、おじいさんが帰りに竹が光っていたので切ると竹から金太郎が出てきて、桃を切ると桃太郎が出てきました。ヘンゼルとグレーテルは大事にその二人の子供を育てた。大きくなってくると金太郎と桃太郎がけんかして血まみれになって死んでいました。そしてヘンゼルとグレーテルは悲しんだ。』

『昔々ある所にある手品師がいました。そしてその手品師が赤いずきんを振ると中から赤ずきんちゃんが飛び出してきた。その赤ずきんはある時川へ洗濯へ行きました。すると川上の方からりんごが流れてきた。ずうずうしい赤ずきんはそれを食べようとした。中からりんご太郎が出てきた。そしてりんご太郎が山へ柿取りに行った。すると大きな柿があった。その柿を食べようとすると、中からかき太郎が出て来た。そして柿太郎がいちご狩りに行ったら大きないちごがあった。その中からいちご太郎が出て来た。』

前者は主人公の名前のみそのまま日本の昔話に移り、『桃太郎』の初まりになり、竹、金太郎が登場する。しかし、せっかく生まれた2人もけんかして死んでしまう。

後者では赤いずきんから生まれた赤ずきんを始め、次から次へといろいろなものが生まれる。その軽々と生み出す力に驚いてしまう。

以上、少し長い引用であるが書かれた全部をのせて、原話と比較してみた。

ここでは食べられないですむものが食べられてしまったり、死なないですむものが死んでしまったり、これらの昔話では、食べること、死ぬことが執拗に繰返され大きなテーマとなる。めでたしや正義の味方、かわいそうな主人公は、良いものとは受けとられず、それどころかその裏を探って真実をあばこうとする。昔話の通常の展開を壊すこれらの傾向は＜既成の場から飛び出そうとする＞彼らの状態を表わしているといえよう。またここには、冗談であるかのように＜ふざけた滑稽さ＞も見られる。昔話はその軽さゆえに笑い話に移行しようと Lüthi のいう所を示す

のかもしれない。しかし一見軽々しく語られたその中に一瞬ゾクッとする恐さ、おどろおどろしいものが感じられる。つまりこれらの話は緊張解消へと一気に向う本来の普話ではなく、新たに何ともいえぬ不可解さ、ひっかかりを残したまま終わるのである。ここでは安らぎではなく脅威が生み出され強められると思われ、前述の方向性とは異なるもう一つの方向性をここに見ることができる。これらの話を彼らがポジと見るかネガと見るかわからないがそこには生の感情がこめられており、それは心の奥深くに沈み込んだ昔話から間接的にひきだされたものである。

6. おわりに

聞き手の心の中に入った昔話がどのように変容するかについて、具体的調査に基き検討し、次に民族学、類話、深層心理学の解釈などを手がかりにしてその奥に存在しているものを探ってみた。また Lüthi が昔話の意義と機能として論じている点との関わりも考えてみた。Lüthi の述べているのは昔話そのものについてであるが心の中の昔話についてもあてはまると思われる。本来昔話には快と脅威の両面が存在し重層構造をなしていることがわかる。しかし、Lüthi のいう純化作用により昔話は脅威のある暗い部分を解き放ち快い明るいものと変化するのである。純化作用のある昔話ゆえに人の心に浄化作用を与える。昔話の特徴とされる、〈あこがれ〉、〈夢のある〉という点についても考察してみた。また中学生の例でみたように昔話は何らかの感情、心を動かすものをひきおこす働きをもつ。ここで述べたのは、心の中の昔話であり、昔話そのものではない。しかし心の中の昔話が昔話を規定し、変容し、新たに昔話を生み出して行くのである。

注

- 1) この調査についての詳しい結果については、高橋美和子 京都大学教育学部修士論文『心の中の昔話像 ―よく知られた昔話を通して』を参照されたい。
- 2) 『 』内は前述した調査の感動点について書かれた記述である。
- 3) 昭和30～40年に発行された絵本、本33点についての調査である。
- 4) 類話は話の展開によって6つに分けられ、その類話に含まれる部分があげられている。

文 献

- 秋山さと子 1978 子供の深層 海鳴社
- Bettelheim, B. 1976 The Uses of Enchantment Meanings and Importance of Fairy Tales (波多野 完治・乾侑美子 共訳 昔話の魔力 1978)
- Bolte, J. & Polivka, G. 1963 Anmerkungen zuden Kinder und Hausmärchen der Brüder Grimm. 5vols
- Duff, von J.F.G. 1934 “Schneewittchen-Versuch einer psychoanalytischen Deutung” Märchenforschung und Tiefenpsychologie 1975
- 河合隼雄 1977 昔話の深層 福音館書店
- 河合隼雄 1979 “昔話の心理学的研究” 日本昔話集成12 角川書店
- Lüthi, M. 1962 Es war einmal ... Von Wesen dos Volksmärchens (野村滋 訳 昔話の本質―むかしむかしあるところに 1974 福音館)
- Lüthi, M. 1968 Das Europäische Volksmärchen <Form und Wesen> 3te. (小沢俊夫 訳 ヨーロッパの昔話 1969 岩崎美術社)
- Franz, von M-L 1974 Shadow and Evil in Fairy Tales (氏原寛 訳 おとぎ話における影 おとぎ話における悪 1981 人文書院)
- 以上
(博士後期課程)